

法名は何のために？

●質問
法名は何のためにあるのでしょうか。

□「名」とは何か□

そもそも「名」は、何のためにあるのでしょうか。「名」には、区別するはたらきがあります。たとえば「佐藤さん」と「山田さん」とは、別の人を指します。

ただ、「名」の意味はそれだけにとどまるものではありません。「名前」には、様々な思いがこめられ、人生の中で、折に触れ、名前の意味・由来を意識することがあり、時には、名前が生きる力となることさえあるでしょう。

法名も名前の一つです。法名の歴史・由来を学びながら、法名の持つ意義につ

いて考えてみましょう。

□法名の形□

浄土真宗では、「釈○○」と「釈」の下に二文字の法名を付けます。

この内、「釈」は姓にあたるものです。この「釈」の下に二文字の法名を付ける形式は、中国の道安(三一四―三八五)によって発案されました。道安が生み出したこの形式は、釈尊の教えに由来しています。

アナヴァプタという泉からガンガー・シンドゥ・ヴァクシユ・シーターの四つの大河が海へと流れ出している。それらは海に流れ込むと、もとの名はなくなり、ただ海と呼ばれる。同様に、クシャトリヤ・バラモン・ヴァイシャ・シュードラの四つの身分があるが、釈尊のもとで出家し、

教えを学ぶ者となれば、元の身分がなくなり、釈尊の弟子というだけになる。なぜなら、私(釈尊)と教え(法)によって生れた者だからである。(増一阿含経)巻二十一、取意)

文章中に出てくる四つの大河は、インドの身分制度の譬えとなっています。インドには古来、厳しい身分制度(四姓制度)が社会に定着し、生活の万端を規定してきました。宗教についても例外ではなく、身分の低い者は、宗教儀礼に關与することが許されませんでした。これに対して仏教では、あらゆる身分の者に出家が許されました。また、いったん海に流れ出た水を「これはガンガー河の水だ」と呼べないように、教団内では、出自によって差別されることはありませんでした。

この釈尊の平等思想を承けて、現在の法名の形があります。道安当時の中国は、封建制度の色濃い社会でしたから、姓は、しばしば、社会的な身分をも意味しました。そこで、出家者の姓を「釈尊」の「釈」に統一し、仏教の平等思想を示そうとしたのです。

では、「釈」の下が二文字なのは何故でしょう。「西遊記」に登場する「孫悟空」は、「孫」が姓で「悟空」が名前です。このように、中国では姓一文字、名前二文字が伝統的に多かつたようです。二文字の法名は、この習慣に由来しています。だとすれば二文字であることに、さほど意味がないようにも思われます。しかし、三文字以上が認められた場合、世俗の価値観が入り込み、長い法名が良いなどとされるでしょう。「釈○○」という形を守っていく

ことにも、釈尊の平等の教えを継承していくという重要な意味があるのです。

□在家者と法名□

法名は、元もと出家受戒した者に与えられる名でした。つまり法名は僧侶だけが持つ名前だったのです。

これに対し、大乘仏教は、出家していない者の救済・悟りを積極的に説く点に、大きな特徴があります。その結果、大乘仏教では、色々な点で僧侶と在家者の境界線が不明確になります。とりわけ、日本仏教ではこの傾向が強く、従来、僧侶だけのものであった法名が、在家者に対しても与えられるようになっています。

真宗においても、顕如上(一一五四―一一五九二)が在家者に法名を授与した記録が残っています。その後、江戸時代を通して、在家者が法名を持つことが一般化していったようです。

真宗の立場から見ると、そもそも阿弥陀如来はすべての者を等しく救おうとしたのであり、救いに僧俗の違いはありません。この真宗の教えをよりどころとして生きていることを誓う名が、法名でありますから、原理的には在家者が法名を持つことには何ら問題がありません。むしろ、多くの人が法名を持つようになり、法名の価値が広く活かされるようになったと評価すべきでしょう。

□法名と戒名□

真宗では法名という言葉が使用されますが、他宗では一般に戒名という表現が用いられます。

古くは、仏法への帰依を意味する法名という言葉だけで、戒名という表現はありませんでした。文献を調べても、戒名は、中国の古い仏典には使用されないの、比較的新しい表現であ

るようです。他宗では、受戒の意味を鮮明にした戒名を用い、真宗では、元もとの名称である法名を現在も使用しています。

□法名についての誤解□

「死んでからいただくもの」というのが、法名に関する最大の誤解でしょう。

しかし、現在は亡くなったから法名をいただくことも少なくありません。こうした現象の背景には、(真宗ではそのように考えませんが)葬儀の時に僧侶として送り出した方が、死者にとって有益だとする、日本独自の考え方があります。

しかし、法名は出家する際に与えられていたのであり、元もと存命中に授与されていたものです。

真宗から見ても、真宗の教えに生きられた故人の姿を、法名を通して偲ばせていただくことには確かに大きな意義がありますが、法

名が信仰に生きるこの名なのであるならば、やはり生前に頂戴するのが本来の形と言えます。法名には、一般に經典の言葉・文字が引かれています。この二文字の中にこめられた意味・思いが法縁となり、自らの生き方に反映されてこそ、法名の意義が十全に発揮されることになるでしょう。

□法名をいっただいて□

釈尊から二五〇〇年、道安から一六〇〇年以上もの歴史を承けて、現在の法名があります。法名をいっただくことは、この歴史のなかに私に加わることであり、名前にこめられた思いを通して教えに出会わせていただくことでもあります。私たちがとって法名は、仏教、浄土真宗の豊かな風景に触れるための大切な窓の一つと言えるでしょう。

(教学伝道研究センター常任研究員 藤丸智雄)